



Title	キェルケゴールの「想起」論
Author(s)	浅野, 遼二
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1998, 32, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キエルケゴールの「想起」論

浅野 遼 二

はじめに

『想起』(Erinnerung)の概念は、キエルケゴール自らが美的著作と呼ぶ『反復』(一八四三年十月十六日)と『哲学的断片』(一八四四年六月十三日)において集中的に取り上げられている。

『反復』において「想起」は、「希望」(Hoffnung)と「反復」(Wiederholung)の中間に位置し、「希望」・「想起」・「反復」の諸概念は、女性や食物や衣服や気分をもつて比喩的に弁証法的手法を駆使して展開されており、「想起」の具体例はメランコリー(鬱病)に取りつかれている青年の「想起の恋」として取り上げられ、「瞬間の至福の確実さをもつ反復の恋」(W.S.4)とは反対に挫折する不幸な恋として描かれている。

『哲学的断片』において「想起」は教師と弟子の人間関係の中で、教師を単なる機縁(Veranlassung)として弟子が真理を自らの中から連続的に「想起す」(sich erinnern)真理認識の方法として取り上げられている。さらに、このソクラテス—プラトン流の「想起」に基づく機縁的關係は人間と人間との間の最高の関係とされ、弟子

は教師と同じ次元に立ち真理の所有者となっている。しかし、キエルケゴールが求めている関係は、神と人の間の関係であり、そこでは人は神と同じ次元にはなく不真理となっている。したがって、この関係において人が自らの中から真理を連続的に「想起す」ことはあり得ず、神より与えられた真理の条件を手掛かりに、つまり、僕で逆説的に出現した永遠の愛としての神（イエス）を信じる不条理の「瞬間」（Augenblick）に、真理（信仰）が見いだされる。神と人との間には不条理な逆説的關係があり、「瞬間」が決定的意味を持っている。

『反復』の「想起」は「反復」より後退した過去の概念としての位置にあり、『哲学的断片』の「想起」は学問上の真理の認識方法であり、キエルケゴールが切望した信仰上の真理の発見方法ではない。キエルケゴールの「想起」の概念は、この美的な二著作において、未来を指向する「反復」よりも劣り、永遠の愛の逆説に成立する「信仰」とは質の異なる無関係の概念として取り扱われている。

しかし、キエルケゴールは「想起」の意味を最初からこのように限定して副次的に整合された概念として使ったわけではない。キエルケゴールの実存思想の形成にとって不可欠な出来事、レギーネとの婚約期間（一八四〇年九月十日～一八四一年十月十一日）中に交わした『手紙』の中では「想起」の言葉が或る意図をもって頻繁に使われている。ヒルシュによって編集されている『手紙』の中から「想起」の概念が重要な意味をもっている三通を取りだして、その初出において、どのように取り扱われたかを考察してみたい。

一 レギーネ宛の手紙——「ぼくのもの」と「お前のもの」の「想起」——

ぼくのレギーネへ。この手紙には日付がない、また日付を打ってはならないのだ。手紙の本質的内容は或る感情

の意識なので——それは、もちろん、どんな瞬間にもぼくの場合には現存している感情の意識であり、たとえ愛の「感情という」全く異なった調子の中にいるにしても——、まさしく、それだからこそ、それでも他のものとのコントラストによってできるような何か或る瞬間の中に現存しているわけではない。……ぼくは以前にはひとりで馬車で出掛けることはなく、苦しみや心の痛みや悲しみ (Leid und Kummer und Wehmuth) がぼくの忠実なお伴だったことを、お前は知っている。今は、旅の連れが多いとは言えない。ぼくが家を出るときには、お前への思いやお前への想起がぼくのお伴をし、ぼくが家へ帰るときにはお前への憧れがお伴をする。フレデンスボルクで、このぼくのお伴たちは落ち合つて、互いに抱擁しキスを交わす。ぼくが大変に氣遣うのは、この瞬間である。なぜなら、ぼくがフレデンスボルクを愛するのは、一瞬間の間とはいえ、筆舌に尽くしがたいほどの一瞬間、ぼくにとつて語ることでできない一瞬間であるからだ。ところで、この手紙には日付がない、したがって、好きなときに書かれたわけだから、また、それはいつでも読まれていいことになっている。何かしら夜の懷疑がお前を不意に襲うことがあれば、お前は夜ですら読めるのだ。なぜなら、ぼくがお前を「ぼくのもの、mein」(お前は、この表現にどんなに多くのことをぼくが結びつけているのかを知っているし、ぼくがお前と別れることになるときには、お前の命はぼくと共にき果てる、[abschießen]でしようと自分で書いたお前は、そのことを知っているわけだ。ああ、それだからぼくたちが結ばれる限り、ぼくの中に閉じこめられる、[einschießen]ようになる。なぜなら、そのときに初めてぼくたちは結ばれる、[vereinigen]のだから)と呼んでいいのかどうか、何か或る瞬間に疑ったことがあったとしても、実際には、ぼくはそのことを疑った瞬間はないからである。否、ぼくがお前のものであることを、ぼくの魂の最内奥の確信から書いているし、世界の最も暗い片隅にいても、ぼくがお前のもの (Dein) であるこ

とを疑うことは決してないだろう (B.S.3334)。(一八四〇年十一月十一日)

婚約して一週間後には後悔が始まり、さらに、この二ヵ月後の手紙で語られているように、すでにキエルケゴールは苦しみや心の痛みや悲しみに鬱がれており、それは『反復』に登場し、自分の恋から逃避するメランコリックな青年をオーバーラップさせる。現実のキエルゴールの場合は、メランコリーに対する養生はフレデンスボルク城へひとりで馬車を走らせることであつた。今もそれが彼の場合には必要となつてゐる。あのメランコリックな青年が「想起の恋」に沈んで挫折したのとあたかも同じように、レギーネを「想起の世界」に導く試みがなされる。しかし、あの青年のように外国への逃亡という外面的解決とは根本的に異なり、「ぼくの中に閉じこめられて、初めてぼくたちは結ばれる」という内面的解決が示される。それゆゑ、内面的な「想起の世界」でのお前は「ぼくのもの」であり、ぼくは「お前のもの」であるという内面化する方法が選ばれる。それは『誘惑者の日記』において誘惑者ヨハンネスがコーデリアを誘惑した際に見られる「精神的官能主義」(geistige Erotik) (E.I.S.453)の展開する「ぼくのもの」と「お前のもの」との間の美的弁証法の先触れを思わせる。しかし、この手紙において試みられているのは、ヨハンネスのようにコーデリアを婚約者から奪つて捨てるのではなく、「お前のもの」となつてレギーネと結ばれる状態を「想い起す」こと(内面化すること)にある。したがって、「ぼくのもの」が「お前のもの」であることが彼の魂の最内奥から書かれるのである。

二 レギーネ宛の手紙——光と影の交錯する「想起」——

ぼくのレギーネへ。この瞬間はぼくたちにとって好都合とはいかないだろう。よからう、それではぼくたちは想

い起してみよう。想起はぼくの特技 (Element) だ、そしてぼくの想起は永遠に瑞々しく、それは流れる川のようにぼくの人生の荒野を通過して波打ち、つぶやきおしゃべりしている。それは絶えず同じことをおしゃべりしつづやいて心の痛みをなだめてくれて、ぼくに合図を送って誘いだすので、ぼくが想起をその源泉へと逆に遡らせていくと、その源泉では想起は少年の頃の暗い言い伝えの中から湧き出てくる。緑の王冠は枯れて凋んでいくけれど、それは天候の変化が起きると再び匂うのとおそらく同じように（雨が降るとすべての想起はこの上なく甘くたまらないほどよく匂うのだけれど）、ぼくの想起が甦るのは対立した気分が互いに触れ合うときにではなく、それどころか、ぼくの想起はいつも生き生きしていて、世間がぼくに対立すればするほど、ますますぼくは力強く想い起している。それだから、ぼくの想起について言えば、ぼくはまだ若いのだ。お前がこのことが分かるようになるのは、最も身近なことではなく時間的に最も遠いことを想い起す老人のようにぼくの場合には事が運ばないということからだろう。ぼくから見ると、理念と人生のどんなに調和のとれた触れ合いも瞬間的に変容して想起へと変化してしまう。想起はぼくにとって最も遠い過去のことを近くに運び、ほんの身近な過去のことを遠くに押し戻すことによって、過去のことを想起という光と影の交錯する中へ (in das Hell-Dunkel) 引き出していくことになる。瞬間がぼくたちに対する援助を拒んだのは、まさしく今日だけれど、ぼくがこのことをここで書いている間には、その時はまだやってきていないのだけれど、ぼくは最も遠い過去のことと同じように、このすべてのことを想い起し、そのことによって苦しみの刺をなくし、悲しみの甘さを残しているのだ (B.S.57-58)。(一八四一年一月―七月)

このレギーネ宛の手紙は「想起」の言葉で埋められている。レギーネを「想起の世界」へ導く意図は明らかである。レギーネを連れて行く「想起」の世界は永遠に瑞々しく、ぼくの人生の荒野を通過して波打ち、いつも生き生

きとし、「理念と人生の調和のとれた触れ合いは想起へと変化する」「想起はぼくの特技」となっている。そこでは老人のように懐旧の念から遠い過去だけを「想い起す」だけではなく、身近な過去を遠くへ、そして遠い過去を身近に引き寄せて、その「想起」の光と影とが交錯する中で、遠い過去や近い過去のすべてを「想い起す」弁証法的二義性が示される。キエルケゴールが、ここで示している「想起」は「反復」に書かれている「想起」のように弁証法的柔軟性を失っていないが、『哲学的断片』に書かれている「想起」と同じように「瞬間」は決定的意味を持つていない。キエルケゴールは「想起」の概念に過去のことを光と影の中で捉える優れた弁証法的二義性と、質的に異なるものの中にある「瞬間」を「想い起す」このできない限界を認めている。

この手紙を読む限り、この「想起」が「反復」において示した「想起」の概念のように、レギーネを〈手をだすわけにはいかない美しい老女〉や〈着ることのできなくなった古着〉や〈満腹感を与えない乏しい路銀〉に例えたり、また〈肉欲的に〉に取り扱うことを許してはいない。

彼がレギーネを導いて行こうと試みる「想起の世界」は永遠の若さを保っている。二年後に示される「反復」の概念は、人生や理念を構成する根本原理となっている。「反復」は〈愛しき妻〉や〈体にびったりの着慣れた服〉や〈満腹と祝福を与えてくれる日々のパン〉や〈勇氣〉に例えられ、これらを「人生は「真摯に」反復することにある」(W.S.4)。だから、キエルケゴールは、「反復」こそ人生であり、人生に不可欠の人間や衣食や気分を「反復することが現実であり、生存の真摯である」(W.S.5)ことを認める。「反復が可能である場合には反復は人間を幸福にする」(W.S.3)に始まり、「反復が現代の人生観である」ことの理由を「形而上学の関心」・「あらゆる倫理的な見方のスローガン」・「あらゆる教義学的問題の不可欠の条件」(W.S.22)をもって示し、ヘーゲル哲学の

「媒介」(Vermittlung) に対して哲学用語としての母国語「反復」の意義を強調する。このように「反復」は人間や人生を導くすべての段階(形而上学・倫理学・教義学)の理念として不動の位置を堅持している。「反復」は「理念と人生の調和の取れた触れ合い」を保っている。このことは、この手紙において「理念と人生の調和の取れた触れ合いが想起へと変化する」と言われていることに一致する。この時期における「想起」は「反復」と同じ意味を包括している。この他にも、この手紙に見られる「世間がぼくに対立すればするほど、力強く想い起す」孤独な人間の「想起」の意識は、「反復」末尾の「読者宛の手紙」において「普遍的なもの」との闘争を続行する「例外者」が「自分自身を徹底的に考え抜いて、自分自身に徹底的に浸透し、自分自身を徹底的に解明する」(W.,S.93) 単独の意識と符合する。この婚約時代の「想起」の概念は「反復」における「反復」の概念と多くの点で同じ意味を持っている。

他方、「反復」に言及する限り、「反復」の著者、コンスタンチン・コンスタンチウスが、あのメランコリックな青年に注目した理由を調べておく必要がある。彼が青年と苦しみを共にするのは、「青年の恋の中には理念が動いていた」(ことや)・・・理念が恋における生命の原理である」(W.,S.13) ことを高く評価する立場にあるからである。コンスタンチウスは、この理念に仕えようとして或る計画を企てるが、青年は、自らの理念を生かすことなく、若い女性を利用した反倫理的な計画に参加せず外国へ逃亡してしまい計画は失敗する。しかし、逃亡先から出されたコンスタンチウス宛の手紙には恋人が別人と結婚したことへの激しいショックと非難が見られ、再度、青年は自分が理念に属さざるを得ないことを告げる。しかし、青年は「想起の恋」の悲しみのみならず「現世(人生)」における「反復と永遠における反復」(Vgl.W.,S.89-90) の本質的違いと「人生が反復である」ことの不可能を語り、「真

の反復が永遠の世界にある」(W., S.90) のに対して「現世〔人生〕では精神の反復のみが可能である」(W., S.89) ことを認めてしまう。「想起の恋」の光と影の裂目は顕著となる。やがてメランコリックな青年の場合、人生と分裂した理念は悲劇を生み、「反復」の導くはずであった理念と人生の調和は崩壊する。人生では僅かに精神的意味の「反復」の可能性のみが言われて、過去を「想起起す」際の悲しみ(影)に伴う甘さ(光)を微かに漂わせている。

三 レギーネ宛の手紙——過去へ遡ってではなく未来へと向っての「想起」——

ぼくのレギーネへ。およそ一年前にぼくがお前に、この香水入りの一壺を送ったことや、お前がその香水に対する強い好みを言ったので、淡い色の花を想起というヴェールの中へ隠すために、ぼくが、二、三日、故意に遅らせたこともそれに付け加えたことを、お前はおそらく想起起しているだろう。今、ぼくはそのことを繰り返し想起起している。こうして、ぼくは、お前が、当時、こんなことを言ったということを想起起しており、お前がこんなことを言ったということを想起起している。このことへの想起起は、このようにしてぼくにとつてさらに好ましいものとなった、「それも」過去へと遡ってではなく未来へと向って (nicht rücklings sondern vorlings) である。これは時間のもつ祝福である。ぼくは、お前に幾重もの包み紙にくるんだ一壺を届ける。でも、この包み紙は内容を見るために性急に破ったり、或いは怒って投げ捨てたりするような種類のものではなくて、反対に包み紙に喜びを持てるようになるものなのだ。お前は、大変な慎重さと注意深さをもつて、一枚一枚と紙を開けていくだろう。そのことによって、ぼくのレギーネ、ぼくがお前のことを想起起していることや、お前自身の

ことを想起していることを、お前は想起することであろう (B.S.62)。(一八四一年九月―十月)

このレギーネ宛の手紙もまた「想起」の言葉をちりばめている。しかも、レギーネが欲しがった淡い色の花の匂いのする香水を送るのを故意に遅らせて、彼女に香水への愛好を強く「想起させる」意図をもって「想起の世界」に導いていく手のこんだ方法が示されている。この彼女が「想起起している」ことを彼もまた「想起起している」。香水の匂いを「想起起す」だけではなく、彼女の話ししたことや仕草もすべて「想起起している」。ここで、さらにキエルケゴールはレギーネと「想起の世界」の中での内面的な結びつきを深めて、「想起起していることを想起起している」という「想起の想起」の意識を徹底して内面化を強く図っている。この「想起」は、彼にとつて好ましいものであり、「過去へ遡ってではなく未来へと向って」という注目すべき語句が加えられている。これは、『反復』において「想起」ではなく「反復」について言われている規定と同じである。そこでは彼は、「想起」と「反復」が同じ運動であつても方向が反対だとして、「すでにあつたものを想起起すことは過去へと遡って反復することであり、これに対して真の反復は未来へと向って想起起すことである」と規定している。したがって、この手紙をレギーネに書き送っている段階では、「反復する」ことは考えられてはいなくて、「想起起す」ことの徹底した内面化を図る中で、「想起の世界」における「ぼくのもの」と「お前のもの」という弁証法的内面的一体感が意識されていたと考えられる。レギーネ宛の手紙は、この時期の「想起」の概念に「反復」と同じような重要な役割を持たせていたことをはっきりと示している。レギーネは永遠に内面化されて、そのまま美しく瑞々しい容姿を保つ絵のようには飾られて保存される意図を見てとることができる。

後年、キエルケゴールは「ぼくの〈彼女〉への関係」(一八四九年八月二四日)の結末の中で、このことを証明

するかのうちに、「ぼくは彼女と一緒に歴史の中へ連れて行くのだ。ぼくは憂いながら、ただ唯一の希望、つまり、彼女を魅了することを心に抱いていた。そこではぼくは拒まれないだろうし、そこではぼくは彼女と並んで歩くだろう、式武官のように彼女を大勝利の式典へと導き入れる。そして、ぼくたちのものである、愛する可愛いレギーネのために、少し場所をください、と言う」(T.H.S.316)と書いている。二人の歴史的記念碑が建てられて、歴史の舞台で相並ぶ姿を永遠に内面化して過去の中へ封印するイメージを、この婚約時代の危機の中ですでにつくり上げている。

彼は、他の手紙の中でも短く回数は少ないけれど、「想起」の働きについて大事な発言をしている。ヒルシュによつて一八四〇年十月と日付が打たれている『手紙』の中で、冬に祝われる幕屋祭について言及し、「想起はぼくの幕屋を神聖ものとして崇める」(B.S.3)とレギーネに書き送っている。ユダヤ人がモーセに率いられて放浪した時代に、住居の決まったことを祝う幕屋祭を「想起起し」て、「想起の世界」こそ、二人の住む内面的世界(幕屋)であることを秘かにレギーネに伝えようとしている。

四 ヘーゲルの「想起」概念とキエルケゴールの「想起」概念の類似性

レギーネと手紙を交わした時期における「想起」の概念は、学位論文『常にソクラテスを顧慮しつつイロニーの概念について』(一八四一年七月十六日)の原理(無限的絶対的否定性)や方法(必然性は可能性と現実性の統一である)が、ヘーゲル哲学に依存していたように『精神現象学』における「想起」(内面化)の概念と酷似している。

ヘーゲルはその序文において、「意識の経験の学」としての「精神現象学が叙述するのは学、一般ないしは知の生成である」(III,S.31)と規定している。この学としての知の形成を示すにあたって、ヘーゲルは内面化(想起)について、個人が無教養な立場から知へと形成される運動において、個人の实体である「内面化された即自」(思惟されたもの)を対自存在の形式へと転換すること」(III,S.34)の必要性を言うことから始める。ついで、彼は真なるものが哲学の真理(バックス祭の陶酔状態)形成の運動を介して内面化されて保存されることを言い、さらに、自然と倫理的世界を支配している民族精神を歌った叙事詩の「歌い手のパトスが内面性の生成であり、想起である」(III,S.531)ことを主張し、また民族の人倫的生命や現実を越えている運命の精神に言及して、この「悲劇的」運命の精神は芸術作品の中に譲渡(疎外)されている精神の内面化(*Er-Innening*)である」(III,S.548)ことを語っている。

こうしてヘーゲルは各要素に「想起」の概念を配置して知の遍歴を終えて、知の最後の形態である絶対知に辿り着いて知の形成過程を「想起起し」、知の生成の一つである「この『歴史の』生成は諸精神の緩やかな運動と継起であり、精神の完全な豊かさをもつて一つ一つを飾りつけている絵の画廊となっている」(III,S.590)ことを言う。精神が緩やかに運動するのは自己(知の主体)がその実体の豊かさ全体に浸透し消化しなければならないからである。それゆえ、「この知は精神が『自己の中へと入ること』(*Insichgehen*)であり、そこでは精神は自分の定在を捨て自分の形態を『想起起すこと』に委ねる」(ebd.)ことになる。このように精神が「自己の中へ入ること」とは「精神の自己意識の夜の中に沈み込んでしまうこと」(ebd.)を意味しており、消えた定在はその「夜の中に」に保存される。この夜に消えて保存された定在が止揚された定在であり、それは以前の定在ではあるが、知の中か

ら新しく生れた定在、新しい世界、新しい精神の形態である。「想起起す」とは、一度は夜の中に消えて再度生れる新しい定在——新しい世界、新しい精神——を保存することであり、それが「内面的なもの」(das Innere)とすることである。「自己を——内面化——すること」(Sich-innerlich-machen) (XIX,S.44) すなわち「自己を想起の世界に委ねること」は、自己の夜の中へ入ることであり、そこでは自己は新しく生まれ変わり、新しい世界と新しい精神の形態をもつて飾られる。この時期、まだヘーゲルの強い影響下にあるキエルケゴールが、ヘーゲルの「内面化(想起)の世界」に想いを馳せて、レギーネと一緒に夜の底(婚約破棄)に沈んで「お前への想起をぼくのお伴にして」、「夜の懐疑」が訪れてもフレデンスボルクでの「一瞬」のように、メランコリックな気分のまま結ばれて新しい精神を取り戻し、自分と創る新しい世界(絵の画廊)を夢見たとしても不思議ではないであろう。

注

キエルケゴールの引用はヒルシュ版による。以下、*Die Wiederholung* は W. Briefer†B. Entweder-Oder は E. Die Tagbücher は L. の省略記号を使用している。ヘーゲルの引用はズールカンフ版によりローマ数字は巻数を示している。邦訳参考文献は以下の通りである。

- (1) 『キエルケゴール著作集』、白水社、一九六二—七〇年。
- (2) 大谷長訳編『婚約』—セーレン・キエルケゴールの遺稿—、創言社、一九七四年。
- (3) ヘーゲル『精神現象学』(樫山欽四郎訳)、河出書房、一九六六年。
- (4) ヘーゲル『精神現象学』上、下(金子武蔵訳)、岩波書店、一九七一、七九年。